

STATEMENTS 21 10 2019



行動するシンクタンク

一般財団法人 下関21世紀協会

Shimonoseki 21st Century Association

思索の人として行動し、行動の人として思索せよ
アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) [1859 ~ 1941] フランスの哲学者

私と下関

一般財団法人下関21世紀協会 会員 福岡佳一郎

下関に住んで今年で7年目を迎えました。学生時代を過ごし、そして偶然なのか必然なのか社会人のスタートもこの下関でした。

私は長崎県の出身で、もともと下関とはゆかりはありませんでしたが、受験の関係で、意図せず下関で学生時代を過ごしました。「下関」という地名は耳にしたことはありましたが、それまで訪れたことはありませんでした。高校は長崎の佐世保であったので、海が近いことや人口が、佐世保が約24万人強、下関が26万人弱ということもあり、とても街並みが似ていると感じたことを覚えています。

私は全国転勤型なのですが、東京での研修を終えての最初の赴任地が下関です。これが偶然なのか必然なのかはわかりませんが、大変な縁を感じています。

実は学生時代よりボランティアで関門海峡花火大会にはボランティアとして関わらせていただいております。社会人になり、何かの縁で21世紀協会への入会の案内を頂いて2年前に入会をさせていただきました。学生時代のただのボランティアとしてではなく、運営に携わる立場となり見え方が変わる部分も多くありました。正直に申しますと、この協会に入会するまでは、「街づくり」ということに対して興味はまったくといっていいほどありませんでした。しかし、街の一大イベントである関門海峡花火大会の準備・運営や様々の議題で下関について考える機会を通して、感じることや考えることが非常に多くありました。



つい最近タクシーの運転手の方から聞いたとても印象に残った話があります。「昔は8月が一番お客さんの少ない時期だったけど、今では8月の海峡花火大会のおかげで県外からたくさんの方が来て一番の繁忙期だよ。」という話です。幼稚な表現になるかもしれませんが、純粋にすごいことだと感じました。同時にやりがいも感じました。

よく昔は下関は人がたくさんいて、今の何倍も栄えていたという話を聞きます。プロ野球の球団があったことや、日本銀行の支店があることから想像はできました。その証拠かわかりませんが、「下関」という地名は有名で、県外出身の私の友人・知人も知らない者はほぼいません。ただ、残念なのは、実際に訪れた割合は少ないということです。

客観的な目線でみると、ここ数年、捕鯨の再開やクルーズ船の受入れ、2023年にあるかぼーとに星野リゾートができることなど着実に街として前進しているように感じています。

その一方でまだまだ、私自身も知らない魅力や発信しきれない魅力は多くあると思っています。そういった魅力の発見や発信に少しでも関わりたいと思っています。

最近、この21世紀協会での活動や先輩方との関りを通して、得た経験や学びをいつかのタイミングで、長崎の故郷にも反映することが私の小さな夢になりつつあります。

私は下関の街は好きです。地元以外で7年以上を過ごした街ははじめてで、第2の故郷のような感覚です。転勤族なのでこの街であとどれだけ時間を過ごせるのかはわかりませんが、少しでもこの21世紀協会を通じて下関の発展に寄与できればと思っています。